

デジタルによる コミュニティの再編

中村 伊知哉

スタンフォード日本センター研究所長

後厄につき肩や腰がダメだ。ぶらさがってみようと思う。そこでぶら下がり健康器である。ネットオークションを覗いてみると、たくさん出品されている。だが、人間ぶらさがるだけでは不足だ。もう一花咲かせるには鍛えるべし。だから懸垂もしてみよう。しかし、懸垂は一時に体重が掛かるため、やわい構造ではぶらさがり健康器が壊れてしまうという。

そこで出品者たちに「懸垂はできますか?」とメールで聞いてみた。ほぼ全員から回答があった。「私は3回できます」。「私は小学生のころ、斜め懸垂が20回できました」。いや私が聞きたかったのは、あなたが懸垂できるかどうかではなく、器具が懸垂に耐えられるかであったのだが、まあいい。要するにそういう素人さんたちがお店を出しているということだ。インターネットがバザールになったということだ。

かつてインターネットは情報ハイウエーと呼ばれていた。道路である。道路というのは、何かを運ぶためのものだ。誰かがつくったコンテンツを運ぶ線だ。だがこの3年ほどで、ネットは広場になった。みんなが自分の持ち物を持ち寄り、共有して交換して、そして新たな価値を生む場となった。やっとここからネットは本領を発揮する。

鍛えるには山登りである。夏、クワガタを捕りに山梨県の山奥に行った。ノコギリクワガタがいた。故郷の京都では、ノコギリクワガタは「ウマ」と呼んだ。ミヤマクワガタは「ヘイタイ」だった。ではヒラタクワガタは何だったか。忘れた。思い出したい。そこで検索してみた。どこかにクワガタ学者か京都弁オタクかそのような権威がいて、きっと教えてくれる。だが、たどりついたのは、各地のクワガタの呼び名をみんなで投稿するページだった。京都市左京区ではヒラタは「ベタ」でした、という投稿があった。そうだったベタだった。みんなが地元の情報を送れば全国版の知識が共有できるわけだ。かつて知識は高みの権威から流れ落ちてくるものであった。これからの知識は横に連結していくものである。

なかむらいちや

1961年生まれ/京都大学経済学部卒業/
郵政省、MITメディアラボ客員教授を経て現職/
国際IT財団専務理事、CANVAS副理事長、CSK顧問を兼務/
著書に『インターネット、自由を我等に』『デジタルのおもちゃ箱』ほか

仕事をさぼってブエノスアイレスに行った。場末の酒場でタンゴに浸っていた。だがネットは通じるから、日本にいるふりをしてメール。東京の知人は私が京都にいたいと思いい、京都の同僚は私が東京にいたいと信じる。ネットに接続する限り私は私である。しかし東京の満員電車で潰されていようと、京都の研究室で脂汗を流して書類と格闘していようと、電源オフの私は社会的には無意味である。もう少しエージェントソフト技術が発達すれば、私の代理人がネットで仕事をしてくれる。自分のことを理解し、情報を集め、交渉するようになる。それは便利なことだが、そうなれば生身の私よりそいつの方が社会的には私だ。そんな私たちも集い、入り乱れ、バーチャルな社会が形成されていく。さあどうする。

2001年9月11日、朝。当時ボストンに住んでいた私はNYでの用事を片づけるためクルマを走らせた。ラジオは聴かずPuffyをかけていた。マンハッタンに入る橋に差し掛かろうとするところで、引きつった表情の警官に引き返せと命じられた。飲み込めぬまま戻ってテレビをつけて事態を知った。あわてて日本の知人に聞けば、みなリアルタイムでニュースを目撃していたという。アメリカ東海岸は通勤・通学時で、西海岸はまだ寝ていた。映像のリアルタイム度は日本の方がうんと高かったわけだ。衛星やファイバーで世界はひとつ。つながってわかりあえば平和になる。もう誰もそんな根拠のない説教は信じない。むしろつながった方が争いは増す。戦争や競争といった国家や企業の争いが20世紀の原動力であったとすれば、21世紀の原動力は何か。

イラクはブロードバンド後初の戦争だ。開戦前、地球規模で反戦運動が広がった。ネットの威力である。デジタル技術が世界を結んだ。しかし、デジタル技術は殺人兵器でもあった。宇宙から数センチの精度で映像解析された地点にピンポイントで爆弾が投下された。地上戦ではウェアラブルコンピュータで武装した兵士が効果的な殺戮を遂行していた。同じ技術が戦争を抑止し、戦争を推進する。技術がどちらに進化していくかは、使う側の態度で決まる。

その年末、米タイム誌がマン・オブ・ザ・イヤーを公募

したところ、オサマ・ビン・ラディン氏は2位だった。堂々の1位に輝いたのは、田代まさし氏。のぞき事件が騒ぎになった年だ。たしかに少々いけないことではあつただろう。が、ビン・ラディン氏に勝るほど大それた仕事をしたとは思えぬ。これは「2ちゃんねる」のコミュニティがジョークで投票した結果だという。

タイム誌はこの荣誉あるイベントのページを削除するハメになったという。世界的なエスタブリッシュメントたるマスコミが、極東の、匿名の、しかし連結したガキどもにいてこまれた。ネット社会の行方を占う事件である。日本の若い連中が国際ネット社会に情報を発信していく意思表示とも読める。

2ちゃんねるのような場や、ソーシャル・ネットワークと呼ばれる友だちの輪は、家庭、学校、地域といった現実空間とは別のコミュニティを形成している。文字も、音楽も、映像も、ピア・ツー・ピア技術で情報を共有し、ダウンロードする。そしてBlogや日記サイトで自己表現する。デジタル時代の行動様式はうねりとなって広がりつつある。

ある日のテレビ番組。渋谷とおぼしき街頭。女子中学生がバナナにマヨネーズをつけて食べている。「おいしいおいしい」。それはちょっとどうか。次のシーンで、彼女たちは、カレーに納豆とマヨネーズをグチョグチョに混ぜて、食べた。「おいしいおいしい」。これはちょっと自分と違うぞ。そうしたら、次、カップめんにも熱いコーヒー牛乳ぶっかけときた。「おいしいおいしい」。

ヤラセ番組ではなさそうだ。ちょっと考え直さなければいけない。味覚というものには三代かかるという。すると私の脳ミソのなかに三代かかって培われてきた味覚のDNAを、彼女たちは根本から覆そうとしているのではないか。パンクではないか。

モバイル文化を築いたのは彼女たちだ。ジャラジャラと飾りのついたケータイでビデオを撮り、歩いてしゃべりながらメールを打つ。その字は、鍛錬なくして読めない。彼女たちの文字は手作りだからだ。ギャル文字だ。若いやつは活字離れというが文字離れではない。振り返れば平安の女性は、かな文字を開拓した。日本のアナログ文化を築いた。当時の世界文明をリードした。千年たつて、平成の女性は、ギャル文字を開発する。日本のデジタル文化を築く。そして現代の世界文明をリードしている。

ビデオとケータイが組み合わさり、テレビ局の中継車並みの機能を手中にする。一億人の歩くテレビ局ができる。ニッポンの若者が世界に先駆けて実践することに

なろう。お父さんは電車でマンガをむさぼり読み、お母さんはカラオケ教室で、こどもはゲーム。国民を挙げてポップな訓練を積むこの国は、デジタルの社会をポップに塗り上げていくことだろう。

近ごろ日本はカッコいいのだそうだ。アニメやゲームが海外から評価されているためだ。だが急にカッコよくなった覚えはない。おそらく千年以上カッコよかった生き様が、デジタルで世界に流れて、外から発見されたただけのことだ。これからもカッコよくありたい。

新しいデジタルの空間、コミュニティが形作られていく。若い世代がつくっていく。どこへ進むのか。まだ読めない。楽しいこともあるだろう。悲しいこともあるだろう。困ったこととしてかすだろう。その社会秩序は10年、100年かけてつくっていくものであろう。

コミュニティをタコつば化させずつくり上げていくのは難しい。肝心なのは、オープンさを維持する努力。そう、スペイン人のピカソやロシア人のシャガールに文化をつくらせた100年前のパリのように。ゲイやレズビアンが堂々とパレードをする現在のサンフランシスコのように。

15世紀の活版印刷により、人は書を読むようになり、考え、疑問を抱き、追求し、3世紀、4世紀めぐって近代科学や資本主義を生んでいった。グーテンベルクはそれを見通していただろうか。デジタル技術を手にするわれわれは、3世紀後に何がもたらされるか空想できているだろうか。

MPEG4で70年間ビデオを撮り続けるとデータ容量が10テラバイトになる。ハードディスクに詰め込めば、今の製品価格で100万円ぐらいだ。これは急速に下がる。生まれたての赤ん坊の頭にビデオカメラをくっつけて、見るモノ一生みんな録画しても100万円。それを全部ネットで見ないでみよう。新しいバーチャル空間が出来上がる。そうすれば何が起きるだろう。空想できているだろうか。しかもそれは、もう市販製品でできる話なのだ。

想像し、創造する(Imagine and realize)。MITメディアラボのテーゼだ。その石井裕教授は、ウェブサイトの情報量に応じて壁に据え付けた風車がなにげなく回ったり、台所のビンのふたを取ると音楽が流れたりするデジタル環境デザインを提示している。バーチャル空間は、パソコンのディスプレイだけの世界ではなく、現実の建築空間とも融合し、共存していく。

アナログの千年からデジタルの千年へと切り替わる今、新しい空間を空想し、設計するチャンスである。